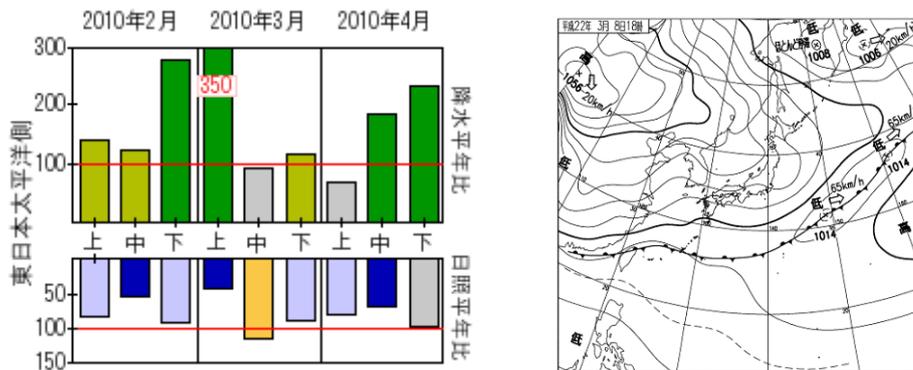


◆◆◆ 今春の気象条件と花粉飛散

今年のスギ・ヒノキ科花粉の飛散シーズンの終了を機に、今春の気象条件と花粉飛散の状況を振り返ってみます。今年（2010年）は東京都の発表によるとスギ・ヒノキ科花粉の飛散量は昨年の22%、過去10年平均との比較では約24%、過去10年間では3番目に少ない年であったそうです。花粉症の人にとっては過ぎやすかった年と思います。

今年の春の気象状況は、図からもわかるように、東日本の太平洋側では寡照で降水量が多かったことがあげられます。気圧配置の推移を見ても、低気圧が抜けた後、高気圧の張り出し方が北に偏ることが多く、きれいな冬型にならずに北東風が入る型になって、ぐずついた天気になりました。昨夏の天候不順で雄花の量が少なかった上に、雨の日が多いために飛び出した花粉が洗い流されてしまったのが原因と考えられます。また、スギやヒノキの花芽はある程度の雨ならば中の花粉を雨から守ることができますが、今春のような雨の多い条件では花芽に水がしみこみ、花粉が流れ落ちてしまったものも多かったのではないかと推測されます。これらのことにより、今春の花粉飛散量は予測をはるかに下回ったものと考えられます。

図 東日本太平洋側の降水量と日照の状況および典型的な気圧配置（気象庁HPから抜粋）



ところで、4月末まで春としては気温が低く、雨の多い天候が続いていましたが、5月の連休になると一転して初夏を思わせる陽気になりました。この時、ヒノキ科花粉の飛散も非常にわずかではありますが観測されました。

しかし、それ以上にイネ科の花粉も観測されています。連休中、お出かけされて花粉症の諸症状が出た方もおられたかと思いますが。

この時期に飛散するイネ科の花粉はカモガヤ、ホソムギ、ネズミムギやネズミホソムギがあり、いずれも外来種である北方系の牧草及びその交雑種です。カモガヤを写真に示しました。身近によく見る雑草です。これらのイネ科植物は河川敷や道路の法面に群生しており、その近傍では1m³当たり100個以上の花粉濃度となることもあります。飛散距離は木本類に比較すると圧倒的に短く、群落から100mも離れば数個/m³程度にまで減衰してしまいますので、近づかなければそれほどひどい症状にはならないと思われます。



写真 空き地に群生するカモガヤ

（環境省、花粉症環境保健マニュアル、2009年版）

通常、河川敷等ではこれらの草が大きくなるうちに草刈りをするのですが、連休中の初夏の陽気がたたって、草刈り前に花粉が飛び出してしまったこともあり、窓を開けて切り通しや川沿いをドライブしていた方は突然くしゃみが止まらないという症状におそわれたのではないかと思います。

これらのイネ科の花粉はアレルギー反応を起こす抗原の強さはスギやヒノキよりも強いと言われており、既に花粉症に罹患している方は要注意です。また、ヨーロッパ他世界的にも花粉症といえばイネ科花粉症が主流です。むしろ、日本で一般的なスギ・ヒノキ科の花粉症は日本独特の花粉症です。東京都の調査によれば、スギ花粉症の方の約3割がイネ科花粉に対する抗体を持っているそうです。このような人がこれらのイネ科植物が群生している場所に近づけば、たちまち発症することとなります。過去に学校等での集団発症事件が起こっているそうです。このことはイネ科花粉症であるけれど、本人がそれと気がついていない人が大勢いると示しています。花粉症は花粉に接しなければ発症しないことから、イネ科花粉症のように発生源のごく近傍でしか飛散していない状況であれば、通常生活では花粉症の症状は現れず、本人も気がつきません。初夏の候の気持ちよさに誘われて、風に吹かれながら河川敷周辺を散歩したら、とたんに風邪を引いたような症状となったという経験のある方は、まずイネ科花粉症を疑った方がよいでしょう。くれぐれもこれらの花粉源に近づかないことが重要です。また、専門医に診察してもらい、抗体の有無を詳しく調べてもらうことも大切です。

(財団法人気象業務支援センター振興部専任主任技師 鈴木基雄)